

—平成17年度 中山間地域総合整備事業
(益美2期地区)に伴う発掘調査報告書—

広戸B遺跡調査報告書

2007年3月

島根県益田市教育委員会

—平成17年度 中山間地域総合整備事業
(益美2期地区)に伴う発掘調査報告書—

広戸B遺跡調査報告書

2007年3月

島根県益田市教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、益田市教育委員会が平成17年度に行つた中山間地域総合整備事業（益美2期地区・石谷地区）に伴う、広戸B遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	益田市教育委員会		
調査員	益田市教育委員会 文化振興課 渡辺 友千代		
	益田市教育委員会 文化振興課 主任主事 山本 浩之		
調査補助員	益田市教育委員会 文化振興課 栗田 美文		
	〃 （臨時職員） 大賀 幸恵 大谷 真弓		
調査指導員	島根県教育委員会文化財課（島根県埋蔵文化財調査センター）		
	主幹 柳浦 俊一		
	山口大学人文学部教授 中村 友博		
調査協力者	島根県埋蔵文化財調査センター 渡辺 聰		
事務局	益田市教育委員会 教育長 陶山 勝		
	益田市教育委員会 次長 領家 貞夫		
	益田市教育委員会 文化振興課長 安達 正美		
	益田市教育委員会 文化振興課係長 木原 光		
	益田市教育委員会 文化振興課主任主事 山本 浩之		
発掘作業員	齊藤 幸夫 藤井 美 田中 莫 宮市 勇		
	藤井 初義 藤原 剛志 村上 豪 渡辺友子		
	吉原 延子 大賀 幸恵 大谷 真弓		

3. 調査に際しては、島根県益田農林振興センターの安部主任をはじめ、島根県益田県土整備事務所の福間主幹および島根県教育委員会文化財課 柳浦俊一主幹に終始多大なご協力をいただいた。また、山口大学人文学部の中村友博教授には一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合せて謝意を表したい。

なお、発掘現場においては土地所有者の大賀巖氏をはじめ、地元の方々に終始多大なご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴遺構—P、土坑状遺構—SKと略号している。なお、現場あるいは編集に掲示した現地図面は、益田市土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。

5. 編集にあたっては、前掲の調査員・調査補助員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺
・栗田がともに行つたものである。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	(渡辺 友千代)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の経過		1
第2章 調査地点域の地理・歴史環境	(渡辺 友千代)	2
第1節 地理的環境		2
第2節 歴史的環境		2
第3章 調査概要	(栗田 美文)	4
第1節 調査区の設定と地区名		4
1.はじめに		4
2.調査区の設定		5
3.地区名		5
第2節 堆積状況		5
1.基本的層序		5
2.堆積状況		5
第3節 遺物と遺構の検出状況		7
1.遺物の検出状況		7
2.遺構の検出状況		7
第4章 出土遺物	(渡辺 友千代)	9
第1節 出土遺物の概要		9
第2節 実測遺物		9
1.実測土器類		9
2.実測石器類		18
第5章 小括	(渡辺 友千代)	21

挿図・図表目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	地形断面図	2
第3図	遺跡位置と周辺の遺跡分布図	3
第4図	調査区配置図	4
第5図	土層堆積状況と遺構分布図	6
第6図	遺構陥入状況図	8
第7図	土器実測図（1）	11
第8図	土器実測図（2）	13
第9図	土器実測図（3）	14
第10図	土器実測図（4）	15
第11図	土器実測図（5）	16
第12図	土器実測図（6）	17
第13図	土器実測図（7）	18
第14図	石器実測図（1）	20
第15図	石器実測図（2）	21
第1表	遺構計測表	7
第2表	遺物集計表	10

図版目次

図版1 調査地点鳥瞰

図版2 1. 調査地点遠景（南から）
2. 調査地点近景（北から）
3. 調査区の設定状況（南西から）

図版3 1. 発掘風景（北東から）
2. A調査区の上層堆積状況（南東壁）
3. B・C調査区の上層堆積状況（南東壁）
4. B調査区の下層堆積状況（北東壁）
5. 土器の出土状況
6. 石器の出土状況

図版4 1. 土器の出土状況
2. 土器の出土状況
3. 石錐の出土状況
4. 石錐の出土状況
5. 遺構の表出状況（A・B調査区）
6. SK01遺構の表出状況（北から）

図版5 1. SK04遺構の表出状況（南から）
2. P03・SK06遺構の表出状況（南東から）
3. SK08遺構の表出状況（南東から）
4. SK03遺構の半蔽状況（北西から）
5. SK07遺構の半蔽状況（西から）
6. SK01・02遺構の完掘状況（北西から）

図版6 1. SK04遺構の完掘状況（西から）
2. SK07遺構の完掘状況（西から）
3. 調査区の全景（北東から）

図版7 実測土器類（1）

図版8 実測土器類（2）

図版9 実測土器類（3）

図版10 実測土器類（4）

図版11 実測土器類（5）

図版12 実測石器類

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本調査は、益田市匹見町石谷地区の県営圃場整備事業に係るもので、それに先駆けて実施した平成16年度の試掘調査の結果で生じたものであった。それは事業計画内に埋蔵文化財（縄文時代）が存在していることが確認されたこと、そしてそれが現状保存が事業工法上において困難であることからであった。

したがって施行側の島根県益田農林振興センター（以下、益田農林）は、同年7月13日に益田市教育委員会（以下、益教）へ事前協議を依頼し、その協議で記録保存もやむえなしという結論に至ったのである。よって益田農林は、島根県教育委員会へ「発掘の通知」を同年8月26日付けで、そして益教は添付資料とともに、同年9月5日に提出して事前の諸手続きを終えたのであった。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

現地調査は、平成17年9月5日から始めた。現地は石谷川に約20mと近く、そして斜地の棚田に立地していることから上位面は削平、下位層は旧河道による氾濫層を呈しているなど、保存状況は良いといえるものではなかった。とくに遺構はそうで、上流側端部にピット・土坑が数箇所検出したにすぎなかったという状況であった。ただし土器・石器類は比較的多量であり、中でも特筆すべきは「肥厚押奈文」とした土器の比率の高さは、本遺跡の性格を考える上で注意されよう。

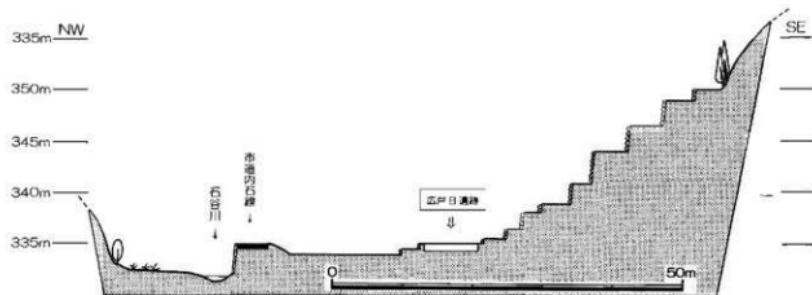
中盤からの降雪には苦労したが、同18年2月9日には無事完了することができた。ここに労苦をともにした作業員の皆さんに、記してお礼を申し上げるものである。

(渡 辺)

第2章 調査地点域の地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

広戸B遺跡は、島根県益田市匹見町石谷に所在するが、旧匹見町の時期には7大字のうちの1つとして行政区別されていた。現在では益田市匹見支所から西方向、直線にして約7km、益田市街からは南東側約15kmを測る山間地に位置する（第1図）。



第2図 地形断面図

地区を貫流する石谷川は、津和野町と境山をなす南西端の上内谷峠（標高600m）に発し、中流域で北西流した内石川を合せて約8km北東流して本流匹見川と合流している。これは白亜紀に生成されたという珪長質火山岩を基盤とするもので、それが北東-南西方向の陥没体の断層谷によって形成しているからである（「匹見層群」『中国地方地学事典』）。そしてとり囲む地盤山地は低位で標高600m、高位では約800m前後であるが、人文活動域は石谷川や内石川が形成した標高約250～500mを測る狭長な河岸段丘を中心である（第2図・図版1）。

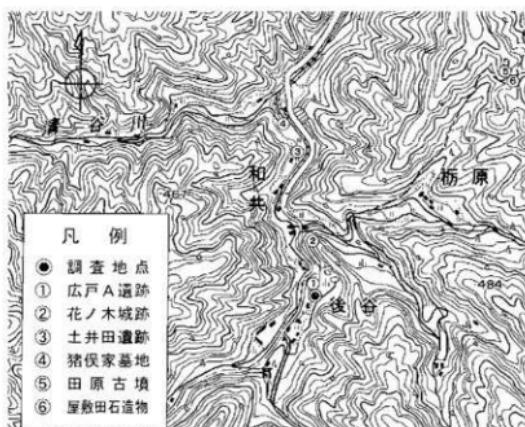
石谷といっている今の地区は、明治7～同22年までの村名に端を発しているもので、それ以前の内石村そして内谷村が合併して成立したものであった。石谷といっているのは、その両村の末字をとって名付けられたものである。両字名とも前音を「内」と書いて「ウツ」と読ませているように、その語源には“狭い”という意味が込められているものであるが、正しくそういった地形的立地にあるといえる地区である。

第2節 歴史的環境

石谷川本流域を内谷、その有支である内石川流域を内石と2区別された本地区は、山野を利用してシイタケ・コンニャクイモ・ワサビを栽培するなど、兼業農家がほとんどである。昭和50年代までは共同でミツマタを栽培し、紙幣の原料として局納するなどの特産にも力を入れていたが、高齢化の問題もあって中絶してしまった。可耕地は狭い流域で行われていて、田畠はもっぱら山地の傾斜を利用することになり、そのため石垣の棚田がひときわ顯著で美しい。

社・寺としては内石に薬蛇神事（市指定）を伝える田原大元神社があり、内谷には若宮神社、そ

して通称は庵寺といわれている無住の浄土真宗派自了寺が現存している。平成元年に廃校となったが、もとは石谷小学校、また農協支所が置かれていたなど、本地区の中心は内谷集落である。近世期の天保郷帳によると内谷村185石、内石村183石余りの生石とあって、両村はほぼ同等での地力を有していたらしいが、とくに内石集落の過疎化が激しい。



第3図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図

て田原古墳がみられるなど、辺地とはいえ原始・古代遺跡もけして暗くはなかったのである（第3図）。

民俗芸能として伝承されている内谷囃子田（市指定）は、上内谷峠を境として接する津和野町日原の横道からのものであり、こうした人文交易は北東—南西方向に走る断層谷が重要な役割を果たしてきたことであろう。

(渡 辺)

内谷には木地屋原櫓という地名もみられ、木地師が逗留していたとともに、鍊業が行われていたことがわかる。内石には中上鍛冶屋・金山鉈・吹屋床鉈・屋敷田鉈跡といった製鉄遺跡がある。また内谷の本調査地の近くには、本村を支配した猪俣庄屋家の墓地がある。当家は中世末期に花ノ木城主の末裔だったともいわれ、近くの磨製石斧や块状耳飾りが採集された土井田遺跡は、該当期における館跡であった遺称と思われる。また境山として両集落を別ける峠近くの内石には中世期の五輪石塔、そして

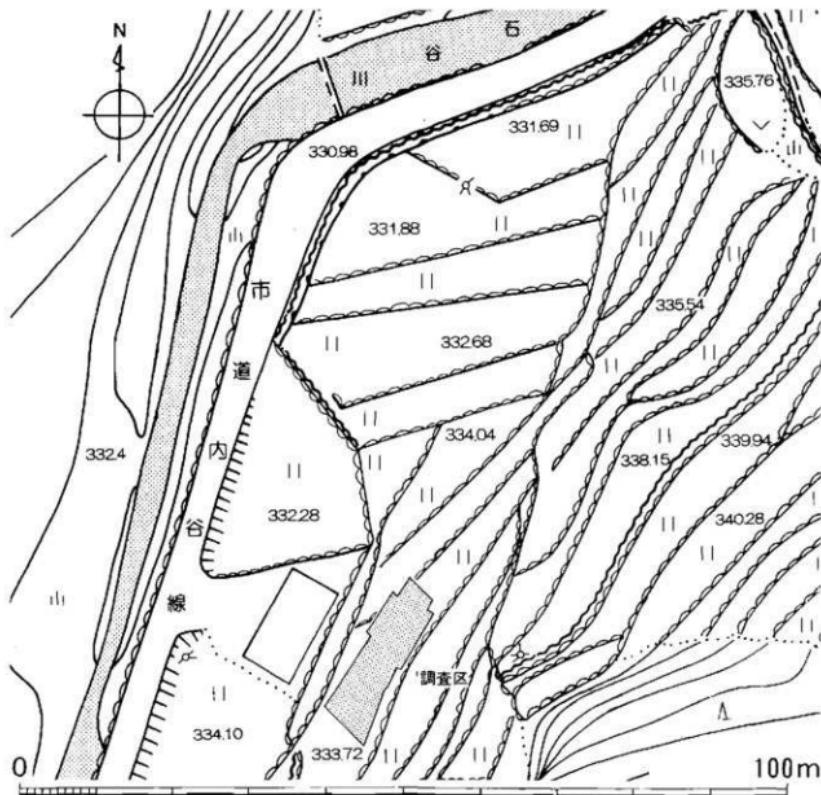
第3章 調査概要

第1節 調査区の設定と地区名

1. はじめに

本遺跡は、小字名を広戸（ひろと）と呼称される島根県益田市匹見町石谷口369番地ほかに所在する（第2図・図版1）。

該当地は、石谷地区のほぼ中央部にあって、北東方向に流下する石谷川の右岸に立地し、そこは山地から緩やかに派生した傾斜地の中腹から河沿いにかけては水田と化されている。また河川沿いには市道内谷線が貫通し、その沿道に民家などが点在するという景観下にある（第3図・図版2-1）。



第4図 調査区配置図

2. 調査区の設定

調査区の設定については、平成17年度の分布調査において層序・遺物などの分布状況がある程度把握されていたので、本命地である水田を中心に設けることにした（図版2-1）。まず基点とする杭を対象とした水田の南東端に設けることから始めた。つぎに基点から北東方向に19.5m測って北東杭を設け、さらにその北東杭から西に向かって4m測って北杭を、そして基点杭から東側に向かって7.5m測って南杭を設けたのである。これら4杭を周回して結ぶといった変則的な造り方をして設定したため、北東-南西方向に細長い区形を呈した調査面積約100m²のものとなったのである（第4図・図版2-2）。

3. 地区名

ほぼ長方形を呈した調査区内には、層序の観察のため、幅約50cm程度のベルトを北西-南東方向に2基のものを設けて3分割とした。これら3区画したものは、アルファベットの大文字を用いて、北東側の下流からA～C調査区と称することにした。また、それらの調査区で出土する遺物の位置関係を明らかにするために、さらに各区内を4・5分割したのである。それら分割したものもアルファベットの小文字を使って、a～e地点と明記することにし、まず掘削を開始したのであった。

A・B調査区を掘削する段階で、6層から縄文土器片が多出し、それらは北西側に偏在して出土するという傾向がみられたので、そこでA・B調査区の北西面を約7m²ほど拡張した。一方、その南東側の壁沿いには、数基の遺構が半出したため、その南東面も部分的に拡張することにしたのである。したがって、最終的には調査総面積は116m²となったのであった（第5図・図版3-1）。

第2節 堆積状況

1. 基本的層序

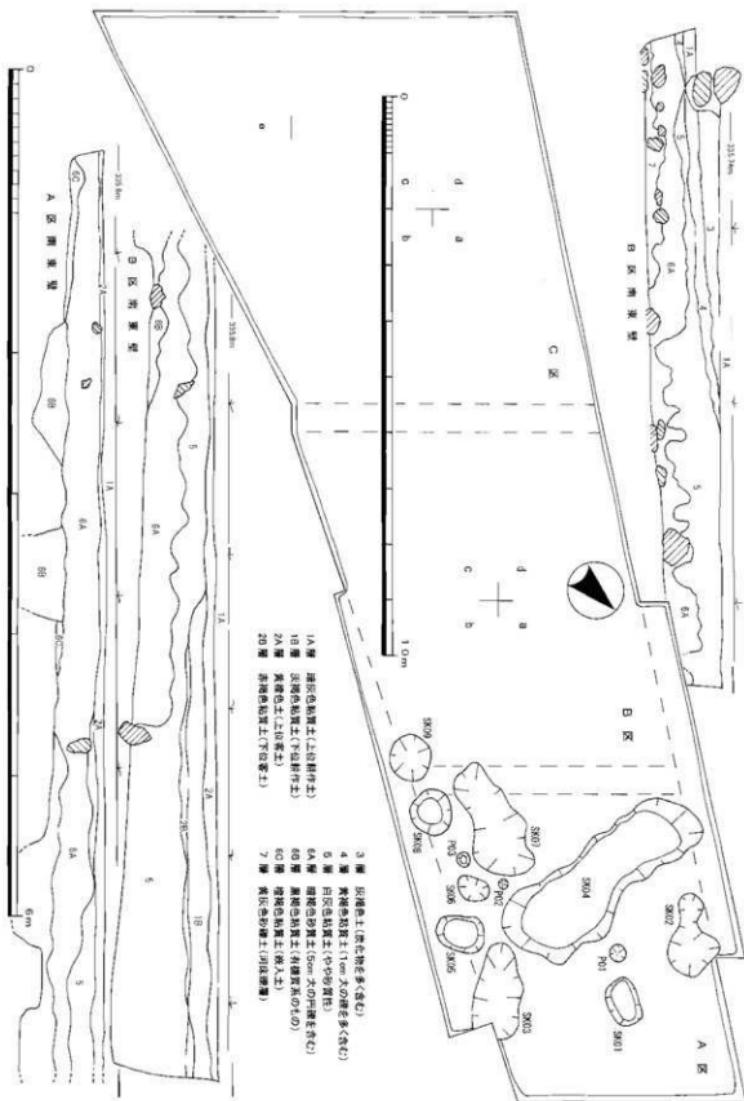
本調査地の基本的層序は、上位から1層の耕作土、2層の客土、3層の灰褐色土、4層の黄褐色粘質土、5層の白灰色粘質土、6層の暗褐～橙褐色土、7層の黄灰色砂礫土の順で堆積していたのである（第5図・図版3-2・3-3）。しかし、この層序については山寄りの南東側では明確に捉えることができなかつたが、次第に低位に向かっていく河寄りの北西側の堆積状況から原層序が把握できたもので、つまり、それ以外のところでは、5層上位部以上が高い深度で削平されたことを窺うことができたのである（図版3-4）。

2. 堆積状況

1・2層は、2重に堆積し水田の再造造成が行われたことが窺われた。これらは人工堆積層といえるものであり、凡そ平均して堆積していた。つぎの3層は、やや粘土質性を帯びた灰褐色土で、全体的には小礫を含み、炭化物もみられた。その層厚は、水田造成時に深く削平されたと思われる山寄りの南東側が薄層で、その逆に河寄りの北西側に向かって厚く堆積していた。これら1～3層までは削平・埋立てによって、その時に搬入されたと思われる約240点の土器・石器類や陶磁器・金属滓類など約80点が採集された。

灰褐～黄褐色の4・5層は、色調から分離したものの、粘土質性の同一のものと思われるもので、

第5図 土層堆積状況と透構分布図



その層厚は10~15cmを測り、上流側の南西側が厚く堆積し、その層中には5cm大の礫を含んでいた。これは層状及び土質などから判断すると、近接する石谷川の氾濫に伴った山土系の堆積土と思われる。このような擾乱的な本層からは、約1200点の縄文遺物や瓦器の1点が出土している。

6層は、有機質系やや粘土質のある暗褐~橙褐色土である。西半部の深層部で約30cmを測るが、北西側へ向かっては希薄となっている。これは前途したように、とくに北東側において、深度に至る削平が行われたものであろうかと考えられる。本層は人為的以前においては、原地形に沿つてある程度の堆積があったと想像される。本層からは縄文遺物が約5,000点ほど出土しており、下位面にはこれらと共に想定される遺構が検出された（図版3-5・3-6）。そして、つぎの7層は、黄灰色をした砂礫土である。B・C区に露出した上位部をみるとかぎり、30cm前後の円礫を含んでおり、実質的には河床疊層と思われたので、下位への掘削は中止した（第5図）。

第3節 遺物と遺構の検出状況

1. 遺物の検出状況

遺物は、1~6層にかけて各層ごとに出土している。ただし、上位の1~3層に出土したものは、人為層といえるものであることから、それらは他層からの搬入したものと捉えられる。また、とくにC調査区の4・5層からの出土遺物については、新旧のものが混在するという傾向からも、おそらく河川の氾濫、地すべり的崩壊などの要因により、他地から流入してきた可能性が高いと考えられるのである。しかし、そうした影響が少なかったA・B調査区北東半にかけては、層序と遺物とが整合的に捉えられる部分もみられ、そこからは纏まりをもった縄文後期の遺物が数千点も出土したのであった（第1表・図版4-1~-4）。その大半は6層の暗褐~橙褐色土に認められ、また下面には明確な遺構が検出されていることから、該当層が文化包含層であったと想定しているのである。

2. 遺構の検出状況

本調査で検出された遺構は、各種あわせて10基のものであった。その殆どがA調査区を中心に認められたもので、基盤層が下路する

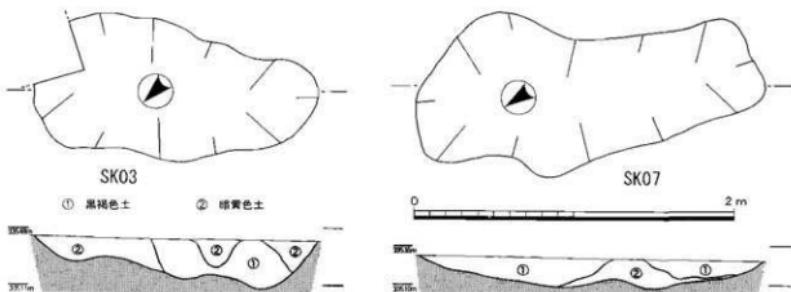
第1表 遺構計測表

	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	表出面標高	摘要
SK01	98.0	60.0	28.0	335.360	炭化物
SK02	160.0	-	19.0	335.270	炭化物
SK03	-	80.0	31.0	335.400	炭化物・焼土
SK04	420.0	110.0	26.0	335.250	炭化物・焼土
SK05	88.0	66.0	36.0	335.360	炭化物
SK06	60.0	38.0	24.0	335.320	炭化物・焼土
SK07	214.0	74.0	23.0	335.260	炭化物
SK08	90.0	76.0	22.0	335.270	炭化物
SK09	82.0	72.0	16.0	335.260	炭化物
P01	28.0	24.0	13.0	335.330	炭化物
P02	22.0	18.0	22.0	335.300	炭化物・焼土
P03	24.0	20.0	13.0	335.300	炭化物・焼土

面に確認されたもので、構築層は6層にあったものと想定できるものである（第5図・第1表・図版4-5・4-6・5-1~-3）。

A・B調査区北東半では、柱穴状（P）のもの3穴、そして土坑状（SK）のもの9基が検出された。いずれも縄文期の文化層として捉えた6層の黒褐色系の土質のものが遺構内に陥入していた。またそれらを遺物と包含・共伴性から考えると、該当期のものと想定されるものであった。

このうちPの柱穴状のものは、径約20~25cmを測り、深さ10~22cmを測るもので、いずれも円形を呈するものであった。これらは6層・7層の層界面に検出されたもので、遺構内には6層系のものが陥入していたのである。その坑形から柱穴だったと想像されるが、その痕跡が数穴ということもあって、その具体的な用途は明らかにできなかった。



第6図 遺構陥入状況図

また土坑状のものは、SK04を除くとほぼ円形・橢円を呈したものが多く、そのうち径の大きいもので160~220cm、小さいもので約80cm前後のものであった。いずれの土坑も坑内を覆う埋土は、有機質系の炭化物を含む黒褐色土が陥入しており、また部分的に7層の黄灰色系の土質のものが嵌入していたのである。これらの土坑には縄文期の遺物が認められ、そのうちSK03・07では僅少な焼土痕も検出されたのである（第6図・図版5-4～6-2）。

SK04は、区内で最も大きな不整形を呈した土坑である。その最大長径約420cm、短径110cmを測り、深さ約26cmのものであった。その坑壁から底面にかけては孤状を呈して、坑内には僅少な炭化物を含む黒褐色土系のものが陥入し、約200点の縄文土器を伴っていた。その残存する坑形から推測すると竪穴住居の可能性も考えられるが、それをより補強する資料は得ることができなく、それがどういった形態のものかについては判然としないものであった（図版6-1）。

このように前述した遺構は、6層から7層に至る陥入状況及び遺物の共伴性からみて、縄文期の遺構であろうと考えられるが、山寄りの傾斜地に立地し、また後世によるところの水田造成などで深度な削平がおこなわれたことが影響して、全体的に良好とはいえるものではなく、具体的な生活誌を明かにすることはできなかったのである（図版6-3）。

（栗 田）

第4章 出土遺物

第1節 出土遺物の概要

遺物の採り上げ方法は、面的分布にはA・B・Cと3分割した区名を、さらに1区名ごとにアルファベットの小文字を用いて細分割して行った。なお垂直分布については層位ごとに、ということは勿論のことである。ただ下層位においては氾濫原的様相を呈していたため、誤認も生じていることもあると思われる。

出土遺物の総数は、第2表で示しているとおり、9,158点であった。中でも縄文土器は8,420点と、全体数約92%を占める。石器類638点で約7%、そして他に金属鋳・陶磁器類といった縄文遺物いがいのものが100数点というように1%余りであった。

上器の中で最も特徴的であったのは、口縁部の外面側を肥厚させ、そこに施文具として巻貝を使った肥厚押捺文土器といえるものが多量に出土したことである。したがって当上器に主点を置き、またこれに前後する上器も捉えながら、以下紙幅のこともあるので概略のみにとどめておくことにしたい。

第2節 実測遺物

1. 実測土器類（第7～13図・図版7～11）

1～46は、後期前葉に位置付けられるもので、うち34までのものは磨消縄文系である。1～7は深鉢の口縁部で、1～3は縄文帯が波状口縁に沿ってめぐり、うち1・2のものは口縁部に刻目を施文する。4～6は菱形の区画文。5は、縄文帯が口縁端に沿う一方、垂直および山形に下垂するもので、この種のものは潮待貝塚（下関市）、また九州では坂の下遺跡でもみられるもの。おそらく7も同様な構成の区画文であろう。

8～33は浅鉢系のもので、うち8は円形の独立した区画文、9はR Lの縄文帯に掛かって巻貝で刺突を施文したもの。10・11は方形の口縁をなすもので、突出部に円孔をもつ。後者は縄文帯が浮帶文ふうに成形されている。10は広島の洗谷貝塚、11は宇部の月崎遺跡に類品をみることができる。これらは福岡K2式に併行するものと思われ、以下23までのものは、それに比定できるもの。

12は、幅広の口縁端部をもち、口頸部は大きく聞くものの、腰部下半は強くしぼむといった器形の浅鉢。外面には多重区画文で構成する。この種は波子遺跡（浜田市）に類品をみることができる。13～23は、細い帯状の磨消縄文で構成されているもの。そして13～15は内面に段を成形し、15は鉤手状のモチーフ文様を描く。16・17は弧状の文様構成としたもの。20は典型的な福岡K2式で、3本沈線による磨消縄文帯で描く。23は、巻貝による擬縄文。24・25は、磨消縄文帯に刻目を施した宿毛式系のもの。

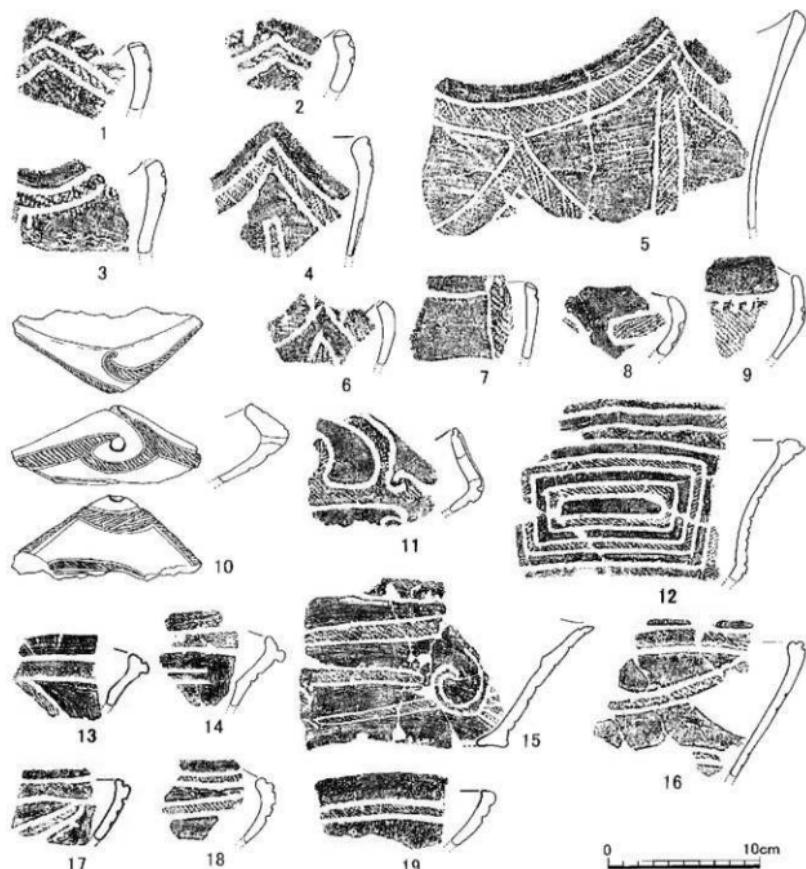
26～33は、口縁部以外の破片部で、いずれも福岡K2式に併行するもの。うち27は前述した12と同模様の多重方形の区画文。32は内面に段を成形し、外面の屈曲部に鋸歯状の沈線を施文する。33は、肩部に巻貝による擬縄文を押圧する。

35・36は浮帶文系の土器。このうち35は壺状のもので、体部に4つからなる渦巻状の浮帶文を横

第2表 出土遺物集計表

出土区 区	銅鏡 等	精製 物	軽金属 類	漆器 類	竹器 類	骨器 類	石器 類	陶器 類	磨石 類	石隨 類	磨削 器	石器 類	鐵石 類	金屬 類	玉器 類	瓦器 類	焼拂 類	羽口 類	舟盤 類	計	合計						
																					2	19					
A 区	1~2層	3	14	17																			2	19			
	3層	1	36	37																			2	19			
	4層	2	7	109																			5	44			
	5層	9	18		186	213	118																1	120			
	6層	80	165	31979	2227				1														237				
	通構	21	48	2	715	785																	2302				
	柱張	14	9	1	288	312																	814				
	部21	26	19	279	324				1														320				
	計	152	270	6366	4034																		334				
B 区	1~2層	1	6	92	99																		84190				
	3層		1	26	27																		559				
	4層	4	24	464	492				1														118				
	6層	74	104	31599	1780					5													1983				
	通構	1		44	45																		49				
	柱張	15	19	492	526																		546				
	計	95	154	32717	2869				6	2	2	2	2	6	150	100	11	279	48	1	1	2	52	3300			
C 区	1~2層		6	6																			16				
	3層		6	6																			359				
	5層	19	11	1	240	271	1																724				
	6層	35	33	1	567	636	1		2	10	2	2	3	1	6	2	66	60	15	2	174	14					
	計	54	44	2	819	919	2																3				
	48%	43	31	2	261	337																	17	1110			
	8C%	10	7		144	161																	1	2	366		
	計	53	38	2	405	498																	1	21	192		
	合計	354	506	137547	8420	2	1	2	26	3	2	3	17	2	26	6	269	234	43	2	638	84	5	2	5	1	1009158

・縦位から連結させているというもの。器面は丁寧に研磨し、肩部から頸部にかけてR L 縄文で施文し、1対と思われる桶状把手を有する。中期末の曾利、加曾利E式の系統を引くものであろう。35は、沈線で区画した縄文浮帯文が円状に施文されている底部片。37は、双耳壺の把手と思われるもので、上下方向に孔を有する。38~45は、沈線文系の土器。うち39は口縁端部に刻目、外面には2条沈線帶で階段・孤状に文様を描くといったもので、福田K 2式直前のものかもしれない。40・41は口縁端部に刻目を施し、42はジグザグ状の沈線を施す。43は、方形区角文で、文様構図は後期阿高系と類似する。44・45は曲線沈線文。46は口縁内面に段を成形して内窓とするといったもので、外面には円形区画文で描く。宿毛式系のものか。



第7図 土器実測図(1)

47～49は、初期の縁帶文土器に捉えられるもの。うち47は突起をもつ口縁部で、頂部に3本沈線を有し、内面に湾曲する。48は、口縁端部に2条沈線を施しているもので、橋詰式に類似する。49は、波頂部をポケット状とし、その端面に刻目を施したもので、長細く下垂する帶部が橋状を形成する。50も同じく橋状把手で、外面に3本の沈線を通し、両脇に刻目を施す。

51～59は典型的な縁帶文で、うち51～57は鐘崎式に相当するもの。これらはいずれも横走の沈線で施文されたもので、縄文施文はみられない。54は細描沈線とするもの、同形式の終末期のものであろう。57は、彦崎K I式系のものと思われ、内面に刺突列点を施して文様区画をし、その上位には鋸歯状の沈線を描く。58は、口縁端部に2つの突起を付し、刻目を施文。おそらく比久根山式に併行するものであろう。59は、縄文地とする鉢で、縁帶文に伴うものと思われる。

60～63は後期末から晩期にかけてのもの。うち60はぶ厚く頸部がくびれ、口縁部が内傾するという器形のもので、後期末の深鉢。61～63は、黒色磨研土器の浅鉢である。61・62は口縁部が長めに外反する。突帶文土器に伴うこともあるが、形態的にみて、その直前かそれ以前のものであろう。63は、頸部に刻目を施しているもので、晩期初頭の浅鉢。

64～134は、中村友博がいう「屋敷式」（『やまぐち学の構築 創刊号』平成17年）、また幸泉満大の刻目隆帶文系III—2類（『宮迫神田遺跡・的場遺跡』2005年）に当る。これを口縁部形態から一応、ここでは肥厚押捺文と仮称し、以下のように類別することにした。

口縁部が外面に長方形状に肥厚し、段が明瞭なもの（A類）—64～77。円みおび、長手なもの（B類）—78～80。三角状のもの（C類）—81～88。円みおびるもの（D類）—89～96。二等辺三角形状のもの（E類）—97～106。二等辺三角形状おび、その端部が内折気味のもの（F類）—107～109。肥厚・段が不明瞭なもの（G類）—110～115。上述した以外のもの（H類）—116～123。波頭部・突起類（1）—124～134。

A類としたものには波状、口端部が平坦で、刻目が顕著という傾向がある。うち64の口端部は卷貝による擬縄文。押捺方向は左傾向が多いが、64・65・67は右向きで、中には72・73・75のように刺突文もある。また施文具が卷貝以外のヘラ具かと思われる69（爪形ふう）・77がある。

B類は、78～80のもので、厚手。うち78は抉りぎみ、79・80は丸みおび、口端部に刻目を施す。

C類は、三角形おびる81～88までのもの。このうち81・82・83・87は波頭・突起部で、81・82・87には下位の押捺帶に連なる文様を施す。81・83・84・86は卷貝による刺突。87の波頭には三叉状に、下位にはジグザグに押捺する。

D類は、円みおびる89～96。このうち89～91は刺突、92は口端・肥厚頂部の2段に併列したもの。94はヘラ状具によるもので、96は内面に段を有する。段の手法は福田K II・宿毛式にもある。

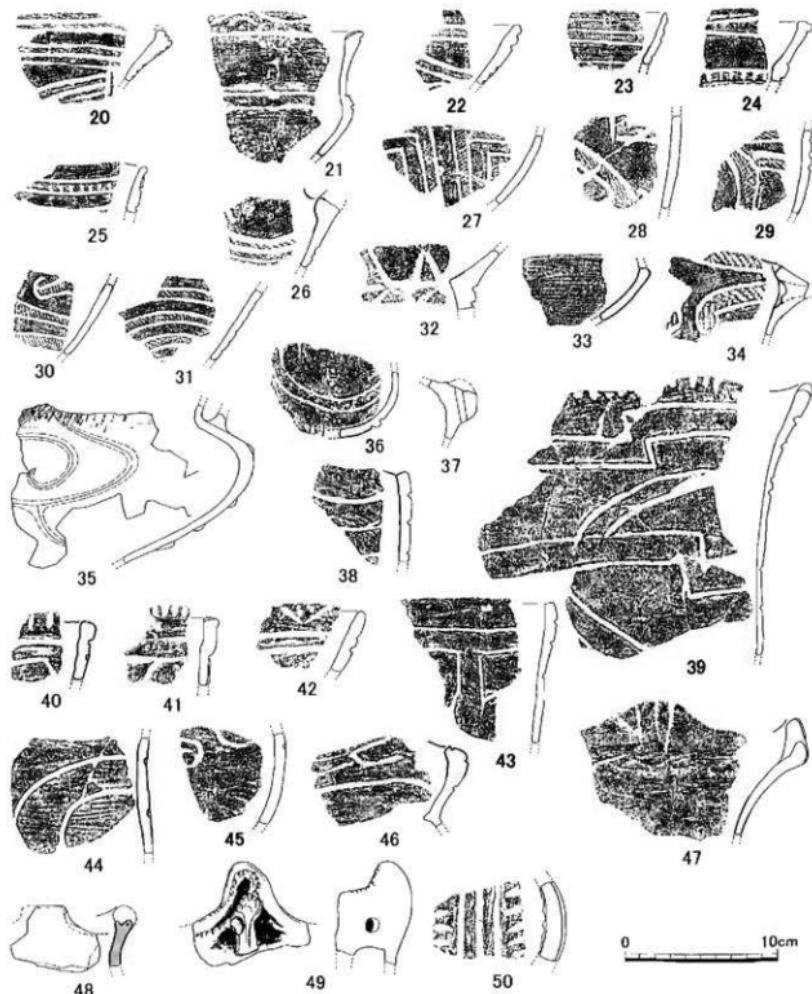
E類は、二等辺三角形おびる97～106。うち97・98は口端部に刻目を有しているもので、本類で扱ったが、口縁部の形態からみて、A類の要素も含んでいる。ただ97・98・100・106にみられるように、施文具がヘラ具状のもので施文していることなどをみると、E類傾向が強い。

F類としたものは、同系の大半は口縁部が外反するという傾向がみられる中で、数片の内屈するものがみられたので、これらを本類として捉えた。それが107～109で、うち107・108は顕著、109は

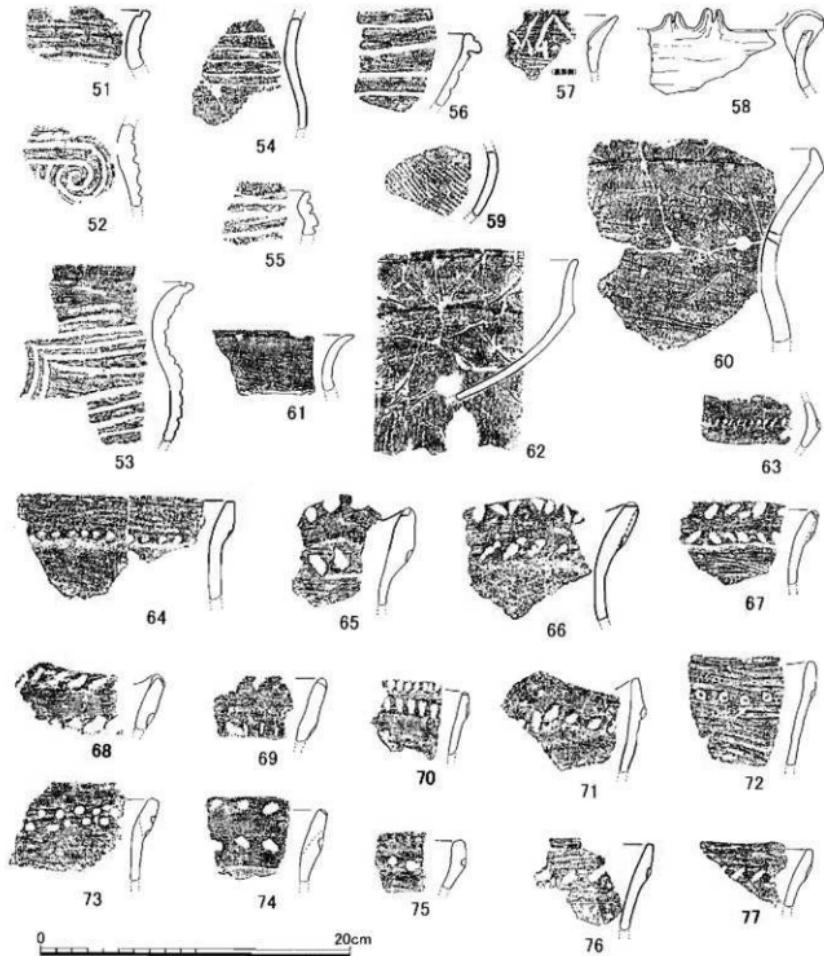
弱い。107は波頂部で、そこに87と同施文の三叉状、下位に巻貝による刺突を施す。胴頸部には巻貝による条痕調整。108・109は左下りの巻貝押捺。

G類は、110～115のように肥厚・段が明瞭ではないもの。うち110・115は口端部に刻みを施し、111・112・114は肥厚が弱く、115は不明瞭である。

H類は116～123のものとし、上述以外のもの、また本系の範疇、その派生とみられるなど、その



第8図 土器実測図(2)

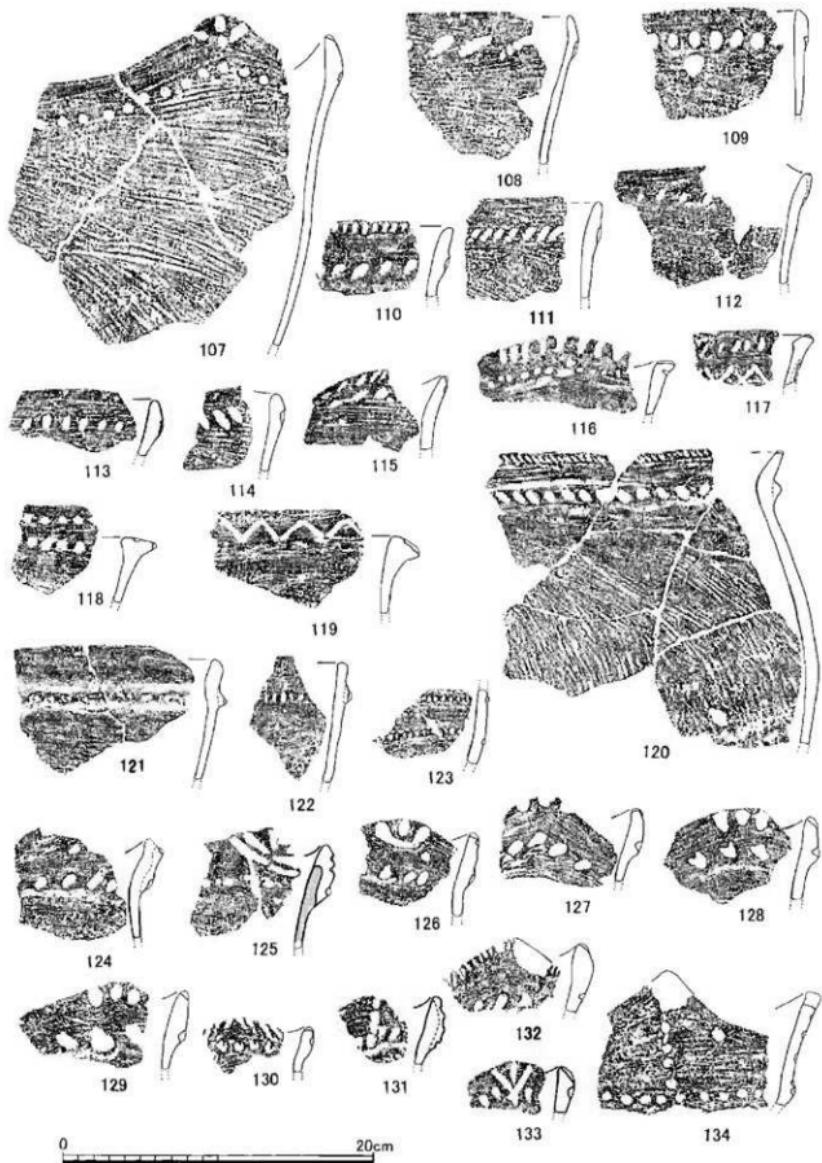


第9図 土器実測図 (3)

他のものとした。うち116は、緩い波状した口縁部で、その波頭部のみ刻みがみられ、外面には刺突を施す。117は口端部に刻目、外面にはジグザグ沈線で描く。118は、幅広の口端部で、外面突出部に刻み、中心部には巻貝で刺突する。形態的には初期の縁帶文系に類似する。119は、幅広の口端部をもち、そこにジグザグの沈線を施したもの。120～123は刻目隆帯文で、うち120は頸部が括れ、胴部が張る。口端部に貝殻による刻み、隆帯にも押捺文を施す。121・122にも隆帯には同様な手法であるが、120のような括れではなく、123のは2本隆帯で高まりは弱い。

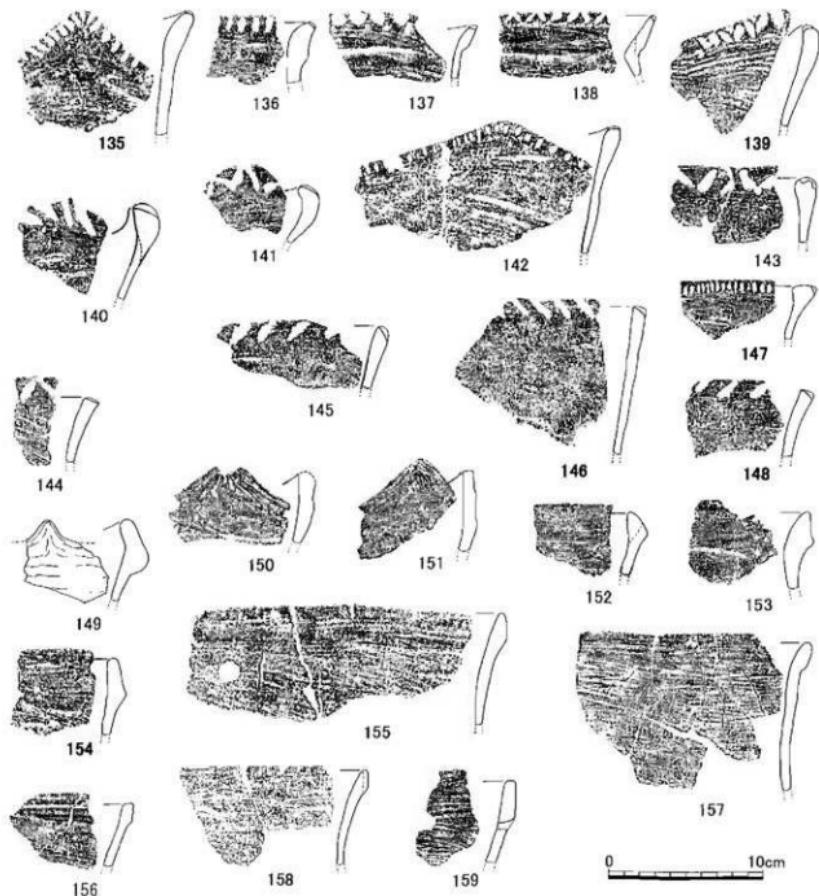


第10図 土器実測図 (4)

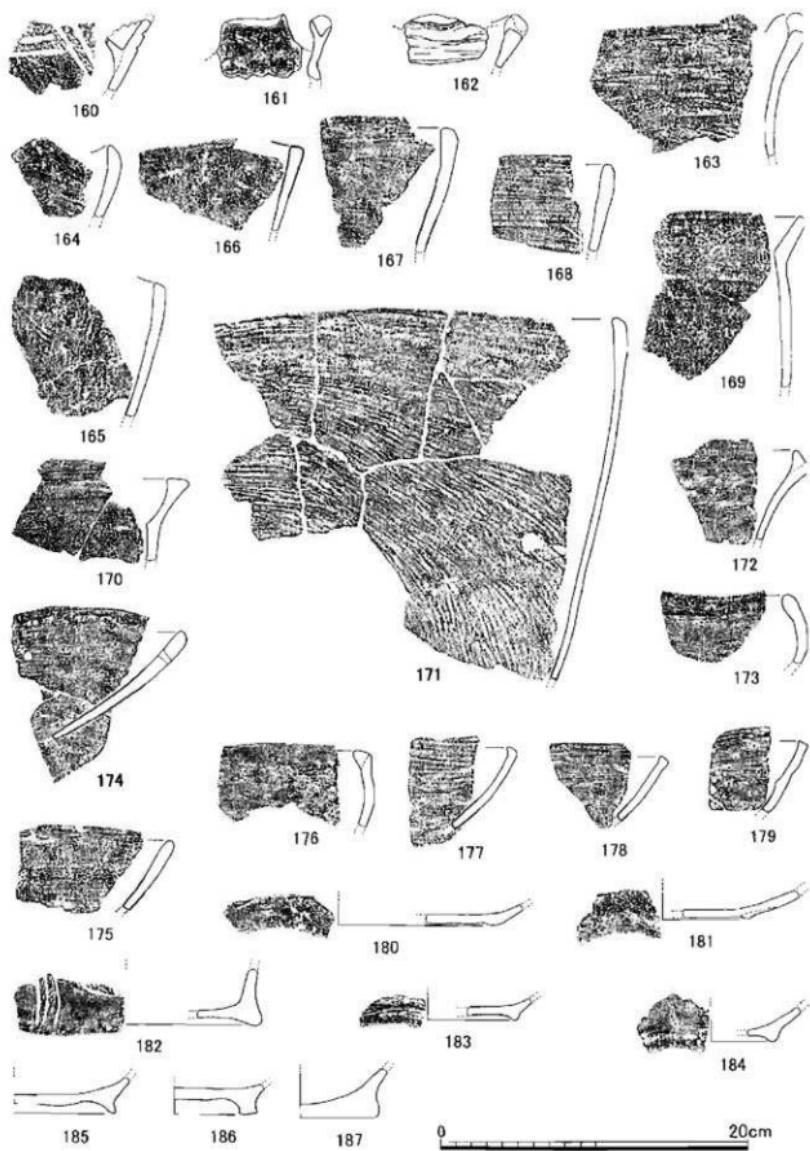


第11図 土器実測図 (5)

1類は、124～134の上述してきた以外の波頂・突起部とする。うち126は波頂部を卷貝による凹線、押捺する。口端部を刻むものは130・132にみられるが、127・128・129は波頂のみ。131は下位に押捺して連導させる。125は、前類の87・107と同施文の3又状に押捺する。134は口端部が平坦で、外面に隆帯をもち、その部位に刺突、また波頂に連導させるといったものであるが、形態的にみて本片は本系列のものとは隙間をおくべきものと考える。124～129のものは口縁部形態からみて、A～C類の範疇のものであろう。



第12図 土器実測図 (6)



第13図 土器実測図 (7)

135～170は無文上器で、このうち138までのものは刻目、そして肥厚して段を有するもの。うち135は波状のもので、東九州のコーゴー松遺跡に類品がある。139のものは口端部に刻目をもつもので、うち142までのものは波状、143～148は平口縁。140・141・142・146・147はヘラ状具で、他は巻貝で刻む。うち14・143・144はジグザグに押捺する。

149～159は、口縁部が「肥厚押捺文」とした形態と酷似した無文上器の1群。うち149～151は波状、152～159は平口縁部。160～162はポケット状の飾装部で、うち160には端部に刻目を施す。163～170は、形態上からみて後期前半期に位置付けられる無文土器。このうち166までのものは波状なし、163・164は波頂が内湾する。169・170は頸部で強く外傾し、後者の内面には段を成形する。おそらく福田K2式に併行するものであろう。171は、口縁部のふくらみ、そして体部の屈曲も弱い。内外面とも巻貝による条痕調整。

172～179は浅鉢系のもので、うち173は内湾する瘤状、179は内面に段を成形する。174・175は研磨がゆきとどき平滑で、後者は黒色を呈する。178・179の口端は平坦。

180～187は底部で、184までのものは精製系、185～187は粗製。うち180・181は平底的、182～184は高台底。182の外面には3本の沈線繩文が下垂しており、福田K2式に伴うものであることがわかる。赤色が塗着する。185・186は高台で、185は外傾、186は高台底が厚い。187は厚手の平底。

2. 実測石器類（第14～15図・図版12）

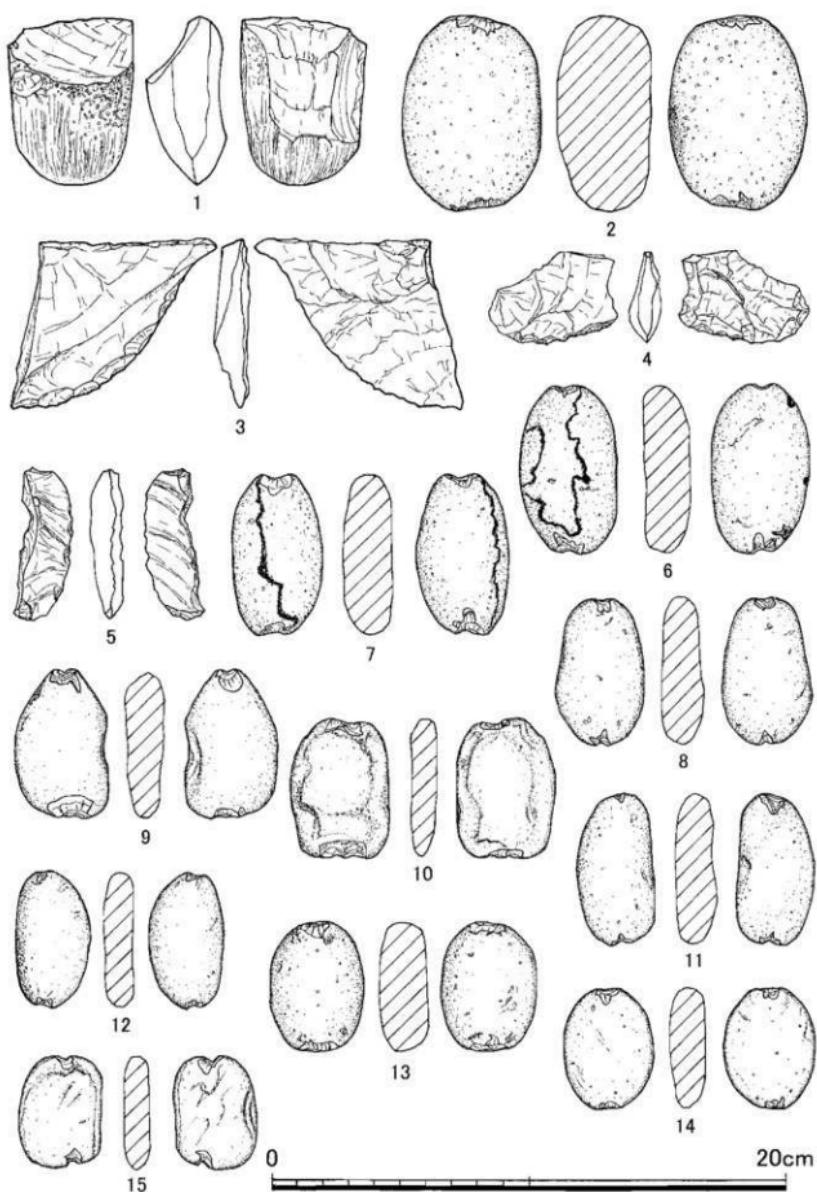
1は、半損した磨製石斧で、安山岩製のもの。2は蔽石で、花崗岩質の河原石を代用したもの。両端には蔽打痕がみられ、磨耗する。3は削器で、石材は安山岩質のもの。刃部面は弧状を呈し、片面向による細部調整がなされている。4は、横型の石匙で、つまみ部分を欠く。石材は安山岩で、刃部は片面からの剥離調整による。5は、振器と思われるもので、刃部面は弧状を呈し、角度が高い。そのため調整は顕著ではないが、片面に僅かな剥離痕がみられる。

6～15は、石錘。うち6は長軸径6.2cm (62g) 、7は6cm (52g) 、8は5.6cm (43g) 、9は5.6cm (38g) 、10は5.3cm (28g) 、11は5.6cm (37g) 、12は5cm (24g) 、13は4.7cm (61g) 、14は4.5cm (33g) 、15は4.2cm (22g) で、その平均は長軸径5.3cm、重さは約40gを測る。これらはいずれも河原石を素材とし、長軸側の両端を打欠ぐという打法で加工したものである。

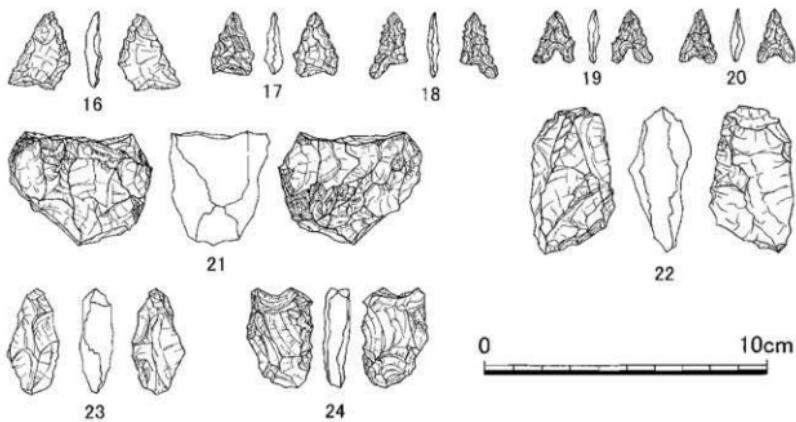
16～20は、石鎌。うち16は安山岩製、17・20はチャート質、18・19は黒曜石（乳白質系）のもの。いずれも無茎のもので、うち17は基部の抉りは弱く、18・19は深い。17・20のチャート質のものは石材によるものなのか、厚手である。

21・22は、いずれもチャート質の剥片。うち前者には2次的な加工痕はみられないが、後者のものは半偏的で、その背面には細部加工の形跡が看取できることから、剥片石器の可能性がこころ。

(渡辺)



第14図 石器実測図 (1)



第15図 石器実測図 (2)

第5章 小 括

本遺跡は、山地を背負い、そして段丘面の乏しい河沿いという立地であった。しかも水田と化された棚田の一画であったため、上位層は削平されている上に、山地からの崩壊土の搬入、また下位層に至っては旧氾濫原を形成していたのである。こうした状況下での調査は、作業の効率は勿論、文化資料価値を失わせてしまう。このことは特に遺構に影響がおよんでおり、上流側の一区画に土坑9基、ビット3基のみという状態であった。

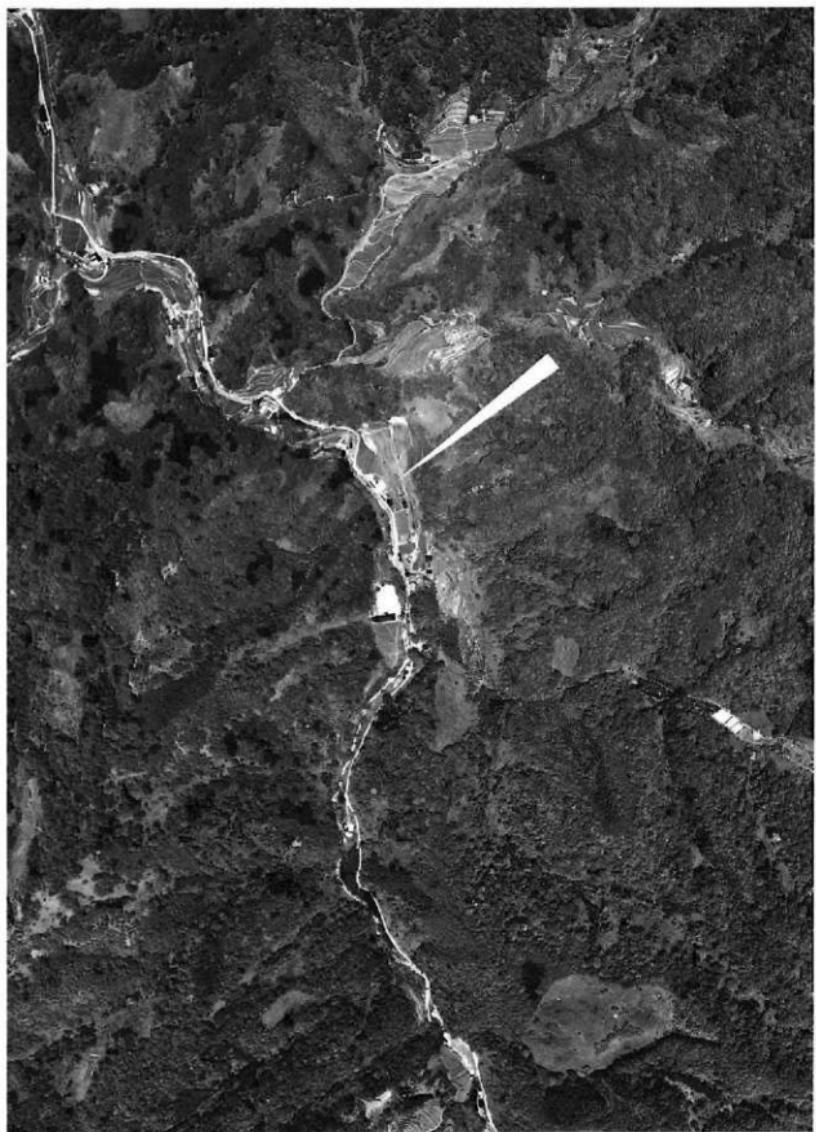
しかし調査面積116m²という狭掘であったものの、縄文遺物を中心に9,000点余りという多量の遺物資料を得ることができた成果は大きい。とくに肥厚押捺文土器と仮称する多量の出土は、本遺跡を特徴付けるのみならず、そうした固有文化をもった集団が存在したことを彷彿させる興味深い資料である。今後はその位置付けなどが問題となってくるが、検討に値する資料の些少から多くの課題がある。しかしながら同系類について、その一端を指摘した幸泉満夫がおり（『西瀬戸内における九州系縄文土器』『誠朱 第3号』1999）、また中村友博が「屋敷式土器について」（『やまとくち学の構築』創刊号 平成17年）として論考した。そしてこれと前後するように、下関市豊北町の的場遺跡（『宮迫神田遺跡・的場遺跡』山口県埋蔵文化財調査センター 2005年）で確認されるなど、資料が増加しつつある。

本報告では、該当類系のものを施文構図からというよりは、口縁部形態を主に類別している。つまり肥厚が顕著、段階的にそうでないものというようにA～G類（I類としたものはA類などの初段階のものに近い）としたのである。その結果、以下のような差異がみられた。まず、口縁部の刻目が減少していくとともに、肥厚帯の押捺文が深く太めであったものから、浅めで小形化していくという傾向である。と、同時に肥厚頂部が下位に移動していくとともに、施文もそれに沿って下位端へという流れである。なお、施文具が巻貝一辺倒であったものが、中にはヘラ状具がみられたり、また口縁部が屈曲化していくということも看取される。これは恐らく時間差による変化ではないかと思われる。

時期については、その盛行期は純然たる三本沈線縄文は僅少であったものの、福田K2式に併行するものではなかったかと思われる。ただ福田K2式との系統的親縁はみられず、むしろ刻目を有する今回とくに顕著であった中津皿式に間に連続性をもっており、該当時期に萌芽したものではなかつたかと思われる。おそらくその初源は、条痕地で口縁部が肥厚するという特徴をもつ單木皿式、また一方では施文方法などからみると、南福寺式土器系に類似した点がみられることから両系統の影響を受け、瀬戸内の周防灘沿岸地域で醸成されたものではなかつたかと思っている。

小括にあたって、肥厚押捺文土器に限って概略したが、いずれにしても今回の同系の多量の発見は、今後の位置付けなどにとって貴重なものであったことには間違いないものと考える。最後になつたが、本報告にあたっては、渡辺聰氏に終始お世話をなつたことをここに記しお礼にかえたい。

（渡 辺）



1. 調査地点鳥瞰

図版 2



1. 調査地点遠望（南から）



2. 調査地点近景（北から）



3. 調査区の設定状況（南西から）



1. 発掘風景（北東から）



2. A調査区の土層堆積状況（南東壁）



3. B・C調査区の土層堆積状況（南東壁）



4. B調査区の土層堆積状況（北東壁）

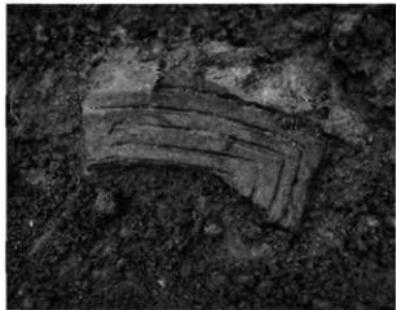


5. 土器の出土状況



6. 土器の出土状況

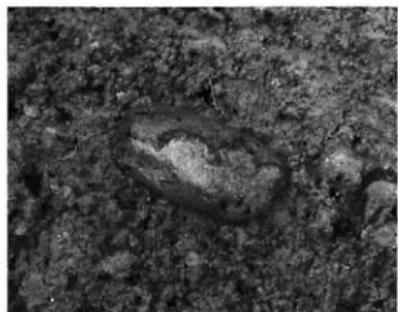
図版 4



1. 土器の出土状況



2. 土器の出土状況



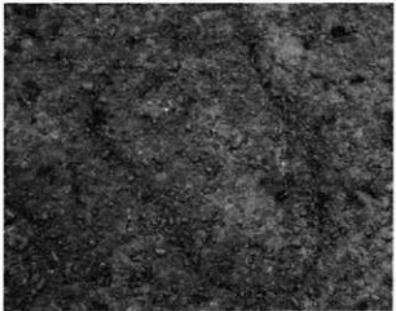
3. 石錘の出土状況



4. 石鏃の出土状況



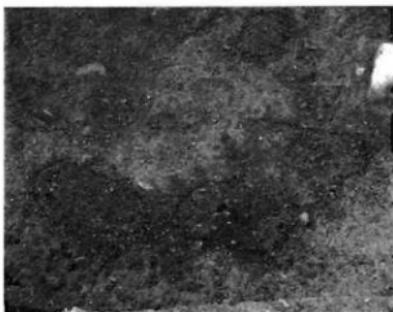
5. 遺構表出状況 (A・B調査区)



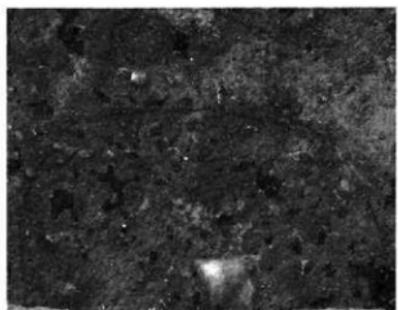
6. SK01遺構の表出状況 (北から)



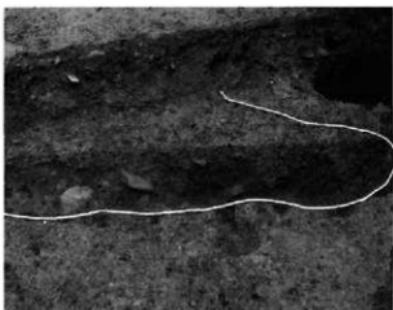
1. SK04遺構の表出状況（南から）



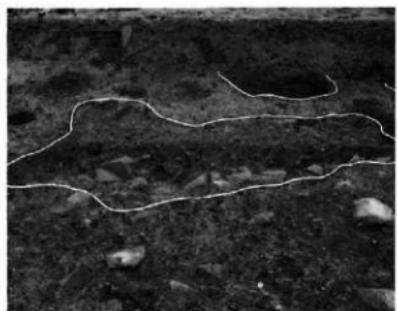
2. P03・SK06遺構の表出状況（南東から）



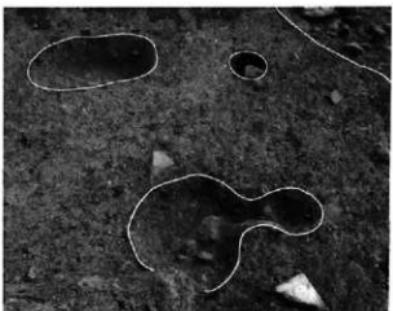
3. SK08遺構の表出状況（南東から）



4. SK03遺構の半截状況（北西から）

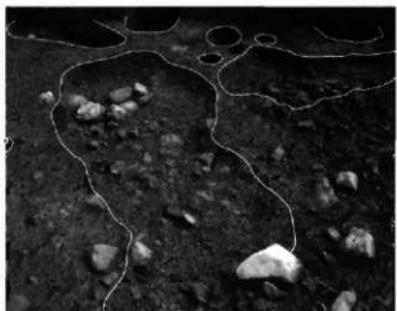


5. SK07遺構の半截状況（西から）

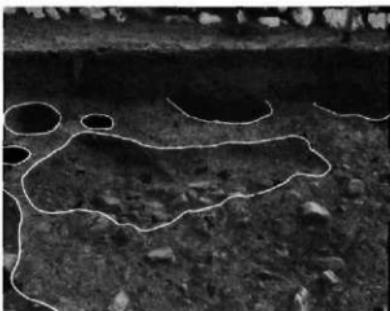


6. SK01・02遺構の完掘状況（北西から）

図版 6



1. SK04遺構の完掘状況（西から）

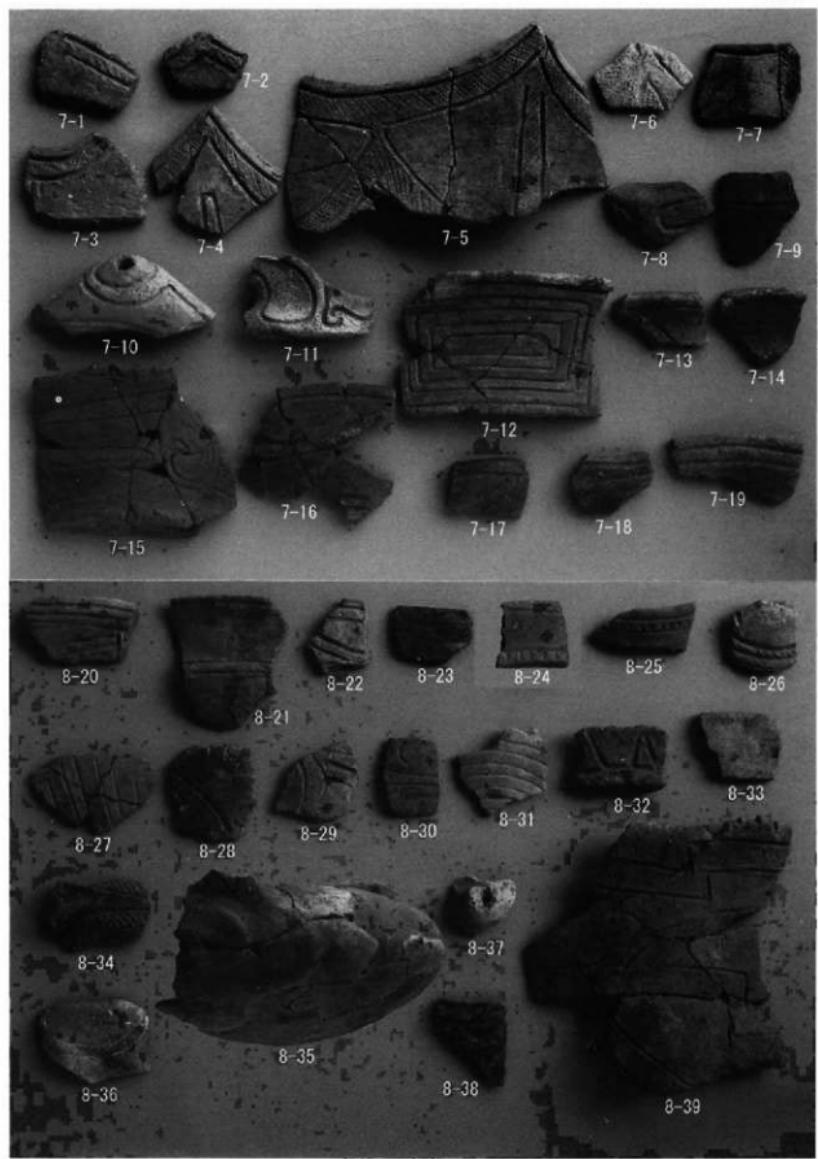


2. SK07遺構の完掘状況（西から）



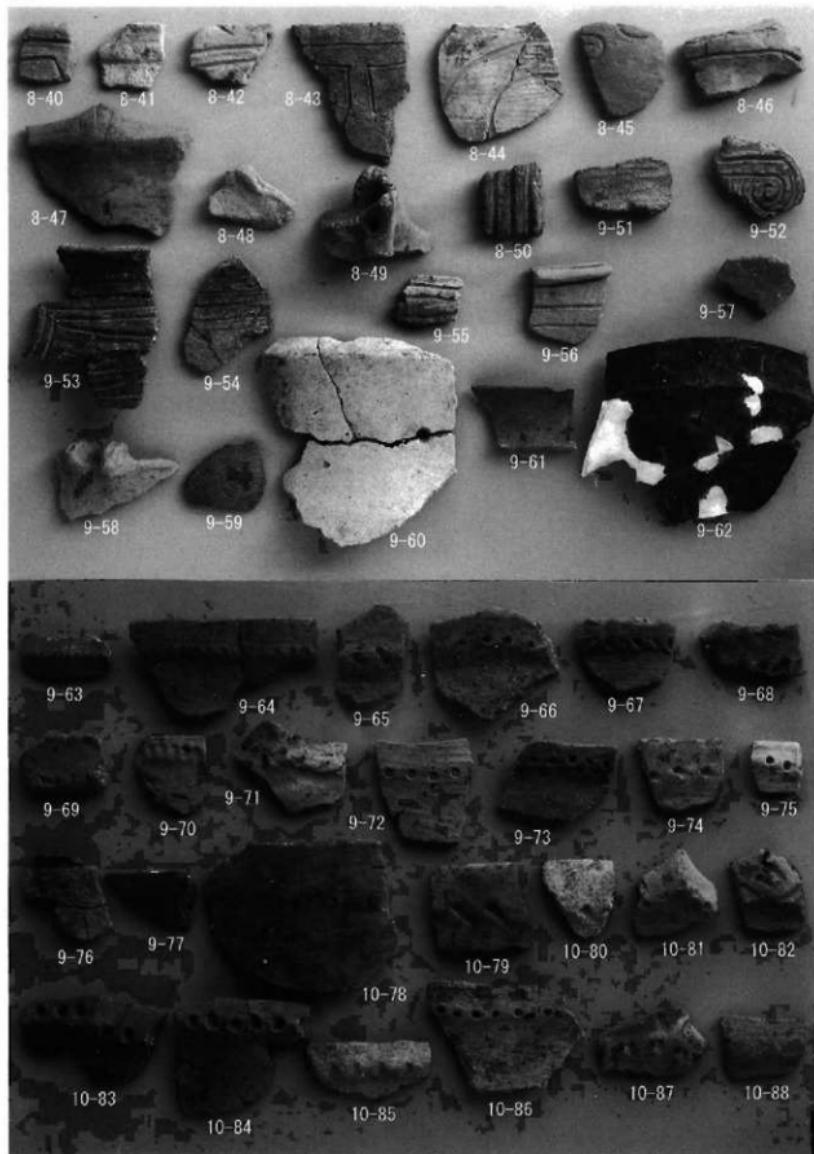
3. 調査区の全景（北東から）

図版 7

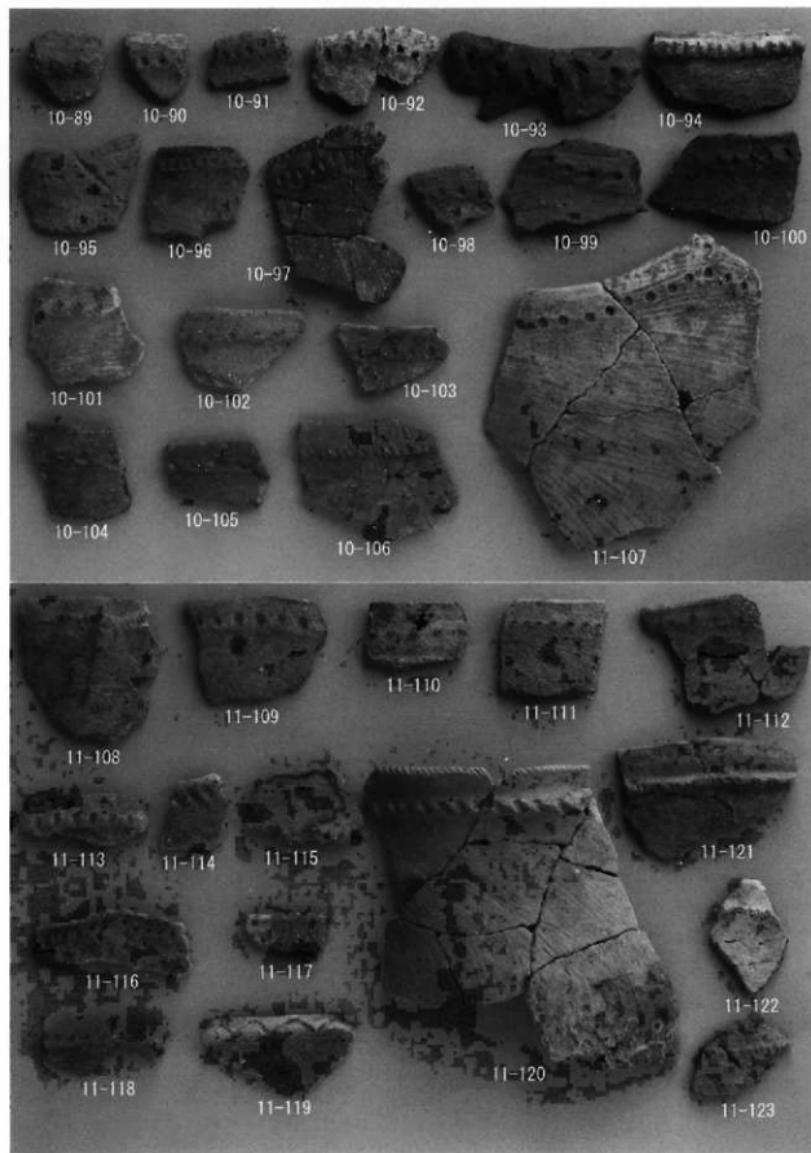


実測土器類（1）

図版8

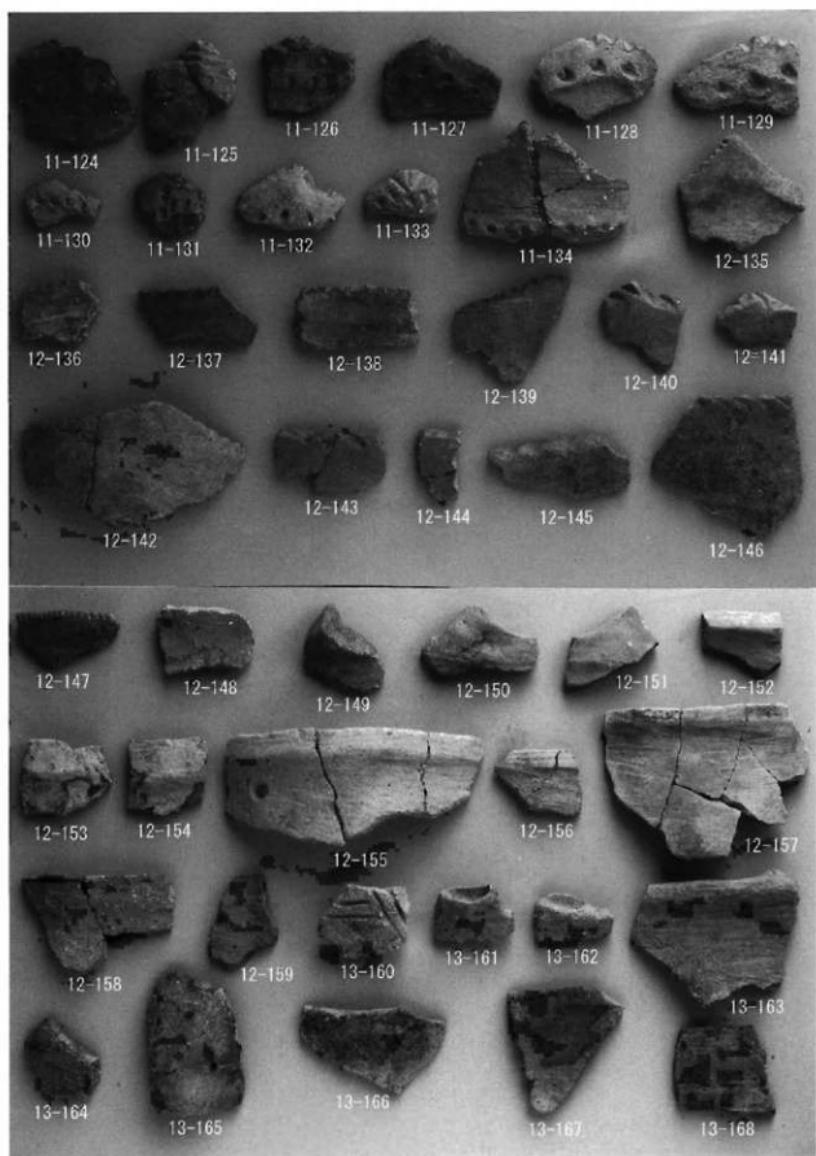


実測土器類（2）

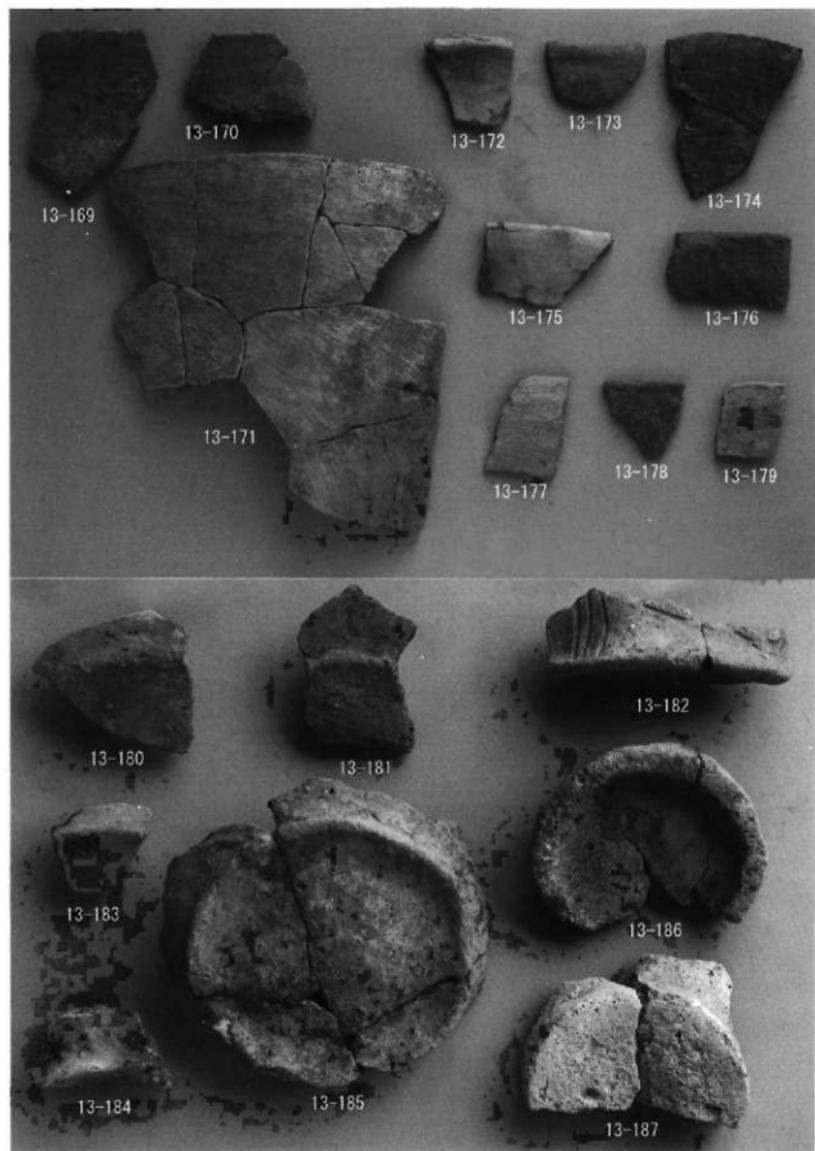


実測土器類（3）

図版10

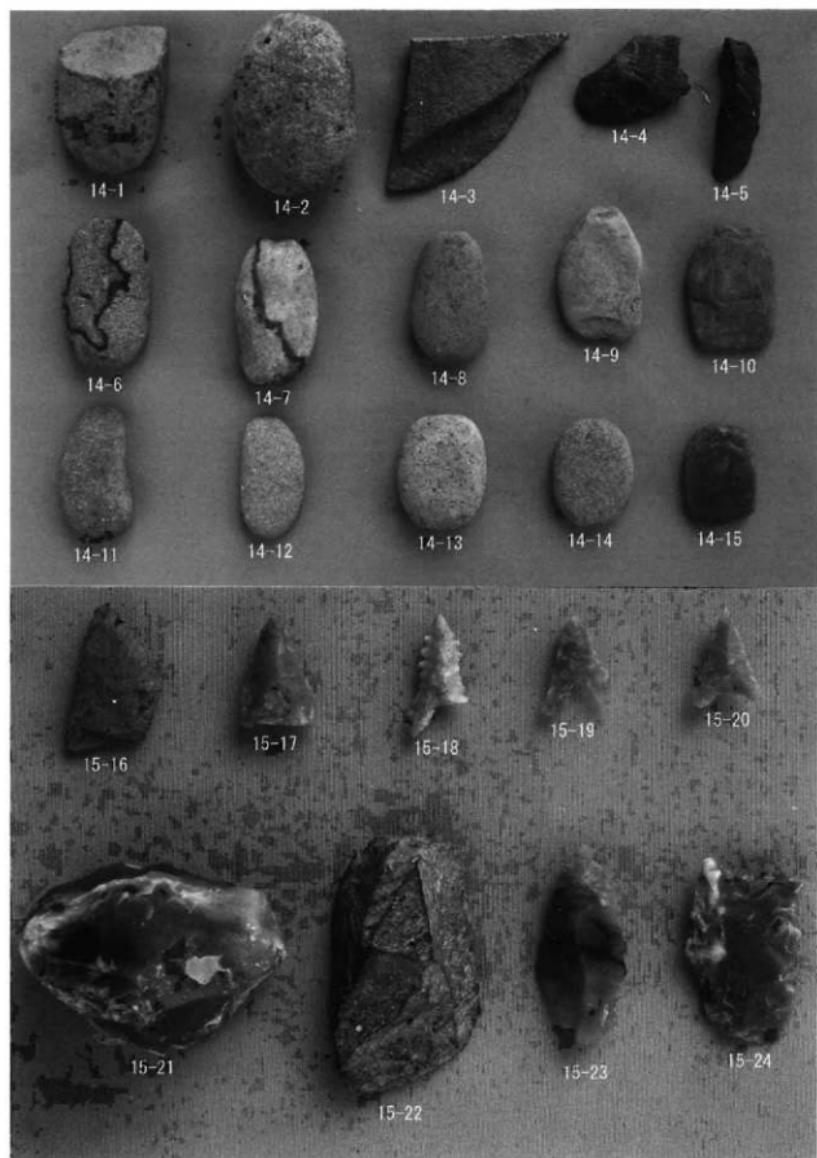


実測土器類（4）



実測土器類（5）

图版12



实测石器类

報告書抄録

ふりがな	ひろとびーいせきちょうさほうこくしょ
書名	広戸B遺跡調査報告書
副書名	平成17年度 中山間地域総合整備事業（益田2期地区）に伴う発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	益田市匹見町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第52集
編著者名	渡辺友千代 栗田美文
編集機関	益田市教育委員会文化振興課（益田市埋蔵文化財匹見調査室）
編集機関の所在地	〒698-0033 島根県益田市元町11番15号 (〒698-1211 島根県益田市匹見町匹見1233-1)
発行年月日	西暦 2007年3月20日

遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積m ²	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
広戸B 遺跡	島根県益田市 匹見町石谷	32204		34度 32分 13秒	131度 55分 43秒	m ²	2005.10.05 ～ 2006.01.27	農業 関連
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
集落跡	縄文時代	柱穴 土坑	縄文土器類 石器類	肥厚押庄文土器 が多量に出土				

平成19年3月8日 印刷
平成19年3月20日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告第52集
—平成17年度 中山間地域総合整備事業
(益美2期地区・石谷地区)に伴う発掘調査報告書—

広戸B遺跡調査報告書

発行 益田市教育委員会

島根県益田市元町11番15号

印刷 西村印刷所

島根県益田市高津六丁目27番8号
